

丹波の石清水八幡宮寺領荘園

—諸国石清水領荘園概説（一）—

徳 永 健 太 郎

はじめに

本稿では、中世石清水八幡宮寺領荘園（以下石清水領と略）を国別に検出しその概要を明らかにすることを目的とする「諸国石清水領荘園概説」の（一）として、丹波における石清水領荘園を概説する。

中世荘園研究における石清水領は、延久の荘園整理令、寺社領荘園におけるイデオロギー支配など、いわゆる領域型荘園の成立期における研究上の重要な論点を提供している。しかし石清水領の全貌については、『国史大辞典』所載の石清水領一覧など、辞書類・事典類の記述が知られるばかりであり、荘園群として本格的にその全貌を把握しようとした研究は存在していなかった。さらに、実質的な所領として機能している諸国の八幡別宮が所領として計上されていない場合も多かった。そこで著者は「中世八幡宮寺領一覧稿」（『研究年誌』六一（二〇一七）、以下前稿と略）において、中世全時代を通じた、別宮も含めた石清水領の検出作業を行った。だがそれとて石清水領の一覧に過ぎず、荘園領主による所領支配を時代を通して構造的に把握する必要性は依然課題として残されたままであった。そこで国毎に石清水領の成立と展開を概説していく「諸国石清水領荘園概説」の成果を蓄積することによって、中世石清水領の全貌を構造的に把握する材料としたい。本稿はその第一弾として、京都に近く比較的濃密に所領が所在している丹波の石清水領荘園を概説することとする。

石清水領は西国を中心に日本全国に分布していたが、荘園の地理的把握はすでに竹内理三氏による『荘園分布図』などの成果があり、石清水領の分布における地理的特徴を考察した先学の成果もある。網野善彦氏は瀬戸内海沿岸に石

清水領が多く存在することを神人の活動などとの関連で指摘しており^{*1}、その後小川弘和氏は一九九〇年代における立荘論の提起を踏まえ、石清水領が賀茂社領の間隙に立荘されたという分布上の特徴を指摘する^{*2}。網野氏や小川氏の手法は、所領の検出と地図への落とし込みにより、広域的な所領分布における地理的特徴を明らかにしようとするものである。その特徴の分析から導き出された瀬戸内海水運との関連や政策的立荘の可能性という論点は、石清水領分布の地理的特徴をめぐる貴重な成果である。

しかし瀬戸内海沿岸といった広域的な所領分布における地理的特徴から演繹的に立荘政策を明らかにしようとするには、研究手法としての限界がある。この手法では所領分布の地理的特徴をあくまで広域的に概観したに過ぎず、それだけでは各荘ごとの立荘経緯や立荘に際しての政治的背景が見えてこないのである。そもそも立荘に大きな役割を果たしてきたのは国衙であって、立荘をめぐる国衙の重要性は、大規模な王家領荘園の立荘が中央、特に上皇主導で進められるようになった院政期以降の状況においてもさほど大きく変わるものではない。立荘を政治的な側面から検討しようとするのであれば国衙の重要性を踏まえるべきであり、また権門領荘園の分布における地理的特徴の解明に際してまずその基礎として検討するべきは、一国内における所領分布とその特徴であろう。一国単位での所領の網羅的検出とその分布から地理的特徴を検討する概説的研究の必要性は、こうした点に求められる。

著者はすでに前稿で諸国石清水領の網羅的検出作業を行ったが、各所領ごとの所在地の検討や立荘時期、立荘経緯などをめぐる検討は行っていない。そこで本稿では丹波を取り上げ、各所領ごとの所在や史料にみえる所領のあり方を個別に概観し、一国単位での所領分布の地理的特徴と立荘時期・経緯をめぐる検討とを行っていく。

*1 網野善彦「中世前期の瀬戸内海交通」『瀬戸内の海人文化』（『海と列島文化』九、小学館 一九九一年）

*2 小川弘和「瀬戸内海沿岸部の荘園制と平氏」『中世的九州の形成』（高志書院、二〇一六年、初出二〇一二年）

なお執筆に際してはジャパンナレッジ版の『角川日本歴史地名大辞典』（角川書店）・『日本歴史地名大系』（平凡社）、「日本荘園データベース」（国立歴史民俗博物館）、細見末雄『丹波の荘園』（名著出版 一九八〇年）を参照した。

第一章 丹波国の石清水八幡宮寺領

一 丹波国石清水八幡宮寺領の概要

丹波国は京都に近く、石清水に限らず権門寺社領荘園が分布する。その概要は細見末雄氏による網羅的な荘園検出の成果に詳しい。一方で丹波国は海に面しておらず、石清水領荘園の分布においてしばしば言及されてきた沿岸部に立地する荘園はない。

丹波国における石清水領荘園は、大部分が院政期までの成立を確認できる。室町期の応永三十年（一四二二）には幕府より酒井郷・葛野荘の地頭職、北莊下司職が寄進された^{*3}。所領の分布は、所在地が確認できるものでは、多気郡 1（酒井郷地頭職）、氷上郡 2（柏原荘・葛野荘）、何鹿郡 3（八田郷於与岐別宮、宮坂荘（綾部八幡宮）、如意別宮（高津荘））、船井郡 1（質美荘）、となっている。また所領単位となっている八幡別宮の存在を確認できるのは、柏原別宮、於与岐別宮、如意別宮であり、別宮であった徴証が綾部八幡宮に確認できる。なお立荘の経緯に関して史料から追うことのできるのは柏原別宮（安田園）だけであり、摂関期の立荘である。

一般に国府近辺には石清水領や八幡別宮が存在することが多い。丹波国府は桑田郡、現在の京都府南丹市八木町屋賀付近に所在していたとされるが、国府近在には現在のところ石清水領は確認できていない^{*4}。

^{*3} 応永三十年十一月十六日足利義持御判御教書（大日本古文書石清水文書『菊大路家文書』一三九号）。

^{*4} なお後述の北莊が桑田郡内の北ノ庄であった場合には、国衙近在の所領だとはいえる。

二 平安期成立の石清水領

(一) 船井郡

質美荘

質美荘は、京都府京丹波町質美付近に所在した荘園である。

治安三年（一〇二三）十月十五日の石清水八幡宮寺祠官兼清解案^{*5}に、定清門胤が相承する石清水極楽寺領の一つとして「丹波国 一所 名質美庄」として挙げられているのが史料上の初見である。その後石清水文書では、極楽寺院主光清に所領の領掌を命じた天仁元年十二月卅日官宣旨^{*6}、宮寺と極楽寺領荘園の本所領掌を命じた保元三年十二月三日官宣旨に見え、また鎌倉期と推定される年月日不詳石清水璽御宮事裏文書には「一通 文治二年六月 三和庄住民延包付質美庄下司可召進之由別当宣 宮寺所司等請文」とあり、三和荘の住民延包が質美荘下司に付して召し進らすよう検非違使庁から命じられているが、具体的な内容はわからない^{*7}。

また東大寺文書の天喜三年廿八日（ママ）後河荘田堵等解には^{*8}、国事雑役を免除された他荘の一つとして「当国船井郡北県八幡宮寺御領所志津禰御庄」が挙げられている。

その後鎌倉期には、善法寺尚清が息子の一人通清に処分した元応元年（一三一九）八月日尚清処分状^{*9}に荘名が見える。

このように、質美荘は十一世紀前半、治安三年には極楽寺領としての存在を確認でき、その後祠官家領として鎌倉後期に至るまで存続していたことがうか

*5 大日本古文書石清水文書『田中家文書』一卷三一三号。

*6 天仁元年（一一〇八）十二月卅日官宣旨。『平』七巻四九六三号。なお当該文書は『大日本古文書』には未収載。『大日本史料』には第三編一〇巻天仁元年十二月卅日条（五〇六頁）に「光清官符」としてその写を収録するが、原本は『田中家文書』の「頼清記」に所収される（桐一二一——二）。

*7 『石清水文書』（『鎌』六巻四四三〇号）

*8 天喜三年廿八日（ママ）丹波国後河荘田堵等解案（『東大寺文書』九 八八六号）

*9 元応元年八月日弥勒寺権別当方祇候人等定書（『菊大路家文書』四九）

がえる。特に鎌倉後期には、質美荘は祠官善法寺家領として確認でき、この時期には庶流であった通清の知行とされている。このように史料上には比較的多く現れながらも、石清水による支配や在地の実態をうかがわせるような内容は含まれておらず、八幡宮寺領としてどのように存在していたのかはわからない。

その後質美荘の名称が文献上に現れるのは戦国期に入ってからである。文亀二年（一五〇一）十二月日石清水八幡宮領所々納下注文^{*10}に、十一月の上米として質美荘から二十一石七斗三合が木代枅にて計上されている。さらに天文六年（一五三七）七月二日室町幕府奉行人連署奉書では、石清水八幡宮領質美荘は当知行であったが近年右京兆（細川晴元）の同朋衆である万阿の押妨によって神役が闕怠しているため妨げを退けるよう右京兆に奉書を発給したことを伝え、祈祷の精誠を抽んずるよう祠官善法寺家の雑掌に命じている^{*11}。文亀二年の注文も菊大路家文書であることから、十六世紀に至るまで祠官善法寺家領として維持され続けてきたことがわかる。

質美荘域には質美八幡宮が鎮座する。社伝では創建は天暦年間とする。史料上石清水別宮であった徴証はなく、おそらく別宮ではなかったと思われる。延元・寛正・慶長年間に社殿を焼失したとされ、現在の社殿は寛政八年（一七九六）に再建された。また室町期の産子集会所（薬師堂）が残り、京都府の登録有形文化財になっている。また十月下旬には質美八幡宮秋祭り（曳山鉾祭）が開催され、四つの曳山と屋台とが境内の参道を巡行する。この祭礼は江戸後期にはすでに行われていたとされる。

（二）何鹿郡

宮坂荘

宮坂荘は、京都府綾部市あたりに所在したと推定される荘園である。

初見は、既出の年月日不詳石清水璽御宮事裏文書である。「治安三年十月五日 宮寺判申庄園別記事」という文書の目録が示され、「丹波国〈如意〉〈栗栖〉

^{*10} 文亀二年所々納下注文（『菊大路家文書』二七六号）

^{*11} 天文六年七月二日室町幕府奉行人連署奉書（『菊大路家文書』九九号）

(84)

〈福志見山〉〈宮坂庄〉」とあり、治安三年（一〇二三）段階で宮坂荘の存在を確認することができるものの、史料上で宮坂の荘名はここでしか見出せない。綾部市井倉には宮代の地名や宮坂の小字が残っており、現在では綾部八幡宮が鎮座し、その社伝では平重盛により石清水八幡宮の別宮として勧請したとされる。なお綾部八幡宮では春の祭礼として御田植え式が知られる。

如意別宮（高津荘）

如意別宮は、現在の京都府綾部市高津町に所在した別宮である。現在の高津八幡宮に比定される。

如意別宮の初見は天仁元年十二月卅日官宣旨（既出）である。また同じく既出の、鎌倉期と推定される年月日不詳石清水璽御宮事裏文書にも「治安三年十月五日 宮寺判申庄園別記事」という文書の概要として「丹波国〈如意〉」が記される。時代が下って戦国期、『康親卿記』所収の永正六年（一五〇九）七月廿八日後柏原天皇綸旨には、

石清水八幡宮末社丹波国何鹿郡高津庄如意別宮事、被遂造榮云々、神妙之至、叡感此事候、仍御神体之儀、任本社之旧例、可令奉遷者、天氣如此、悉之、以状、

永正六年七月廿八日 左中将判（中山康親）

田中清若殿

とあり、ここから高津荘に如意別宮が所在していたことが判明する。また充所から、祠官田中家領であった可能性も考えられる。

ところで如意別宮の鎮座する高津は、古代は何鹿郡高津郷であった。中世に入ると上高津と下高津とに分かれたようであり、如意別宮は上高津にある。一方、観音寺が所蔵する建仁二年（一二〇二）三月日某下文^{*12}によると

下 六人部新御庄政所

補任 高津村観音寺別当職事

平高盛

*12 丹波観音寺文書。『鎌』三卷一二九七号。

(後略)

とあり、また弘安八年（一二八五）四月日某袖判田地寄進状*¹³には

(花押)

奉寄進 六人部新庄下高津観音寺如意輪供田事

(後略)

とあることから、下高津は六人部新荘のうちにあり、また「高津村」と称されていたことも判明する。なお六人部新荘は南北朝期以降は天龍寺領となっている。

また本荘である六人部荘は、八条院の御願寺蓮華心院に施入された荘園で、八条院領、その後安嘉門院領を経て大覚寺統に伝領され、後醍醐天皇が伝領しており、南北朝期には天龍寺領となった。したがって新荘はもともと六人部荘の一部であったものが新荘として立荘され、その荘域が下高津だったと考えられる。なお六人部新荘の領家や預所は未詳であるが、地頭が存在していたことも確認できる。

したがって高津のうち、上高津が如意別宮の石清水領、下高津が六人部新荘であったことがわかり、如意別宮は上高津を領域としていた所領であり、高津荘としては立荘されていなかったと解するべきであろう。時代が下り永禄八年（一五六五）十一月一日の代官職請文*¹⁴には「石清水八幡宮領上高津庄御代官職」とみえ、中世後期には「上高津庄」の呼称も用いられていたことがわかる。

於与岐別宮

現在の綾部市於与岐町に所在した別宮である。

石清水領としての徴証は、元暦二年（一一八五）六月日丹後国池内保百姓等陳状に見える。本文書は前半と後半とが別々の状態で伝わっており、前半部が東京大学史料編纂所架蔵の影写本「山科家古文書」、後半部が島田乾三郎氏所蔵

*13 丹波観音寺文書。『鎌』二〇巻一五五七八号。

*14 『田中家文書』一卷二九九号。

(86)

文書中にある。このうち後半は『平安遺文』で活字化され知られていたが^{*15}、石井進氏によって両者が一体の文書であることが明らかにされた^{*16}。さらにその成果は『舞鶴市史』通史編や『宮津市史』の通史編・史料編にも反映されている。なお於与岐別宮の名前は石清水側の史料には一切現れないが、寿永三年四月十六日平辰清寄進状案^{*17}によると、この時八条院女房弁殿局に寄進された丹後国大内郷の四至として「東限 丹後国（ママ）何鹿郡八田上林〈八幡宮御領／川上大坂〉」とあり、この八田上林が於与岐別宮の荘域を指すとも考えられる。

この陳状の内容は、丹後国池内保と丹波国於与岐別宮との相論について、於与岐別宮側が主張する、池内保の山野を買い取った点、於与岐別宮の庄倉にあった御供料稲二百石や竈殿の釜・鍋などが盗まれた事件に対する、池内保側の反論である。この陳状以外に、石清水領於与岐別宮としての徴証を史料上からは確認できない。

なおその後、丹波安国寺文書所収の寛正二年（一四六一）の何鹿郡所領注文に「於与記」とみえるが^{*18}、この時期に石清水領であったかどうかはやはり確認できない。

於与岐には於与岐八幡宮が鎮座する。社伝によると当初は現在市の瀬橋が架かる伊佐津川沿いの小山に鎮座していたが洪水で流出するなどの被害を受け、その後正徳五年（一七一五）に現在地に再建されたと伝える。当社秋季大祭は株座によって営まれている点が特徴で、鼻高の面をつけた王の舞の芸能が伝わり、獅子舞・田楽とセットになって古態を残し、京都府無形民俗文化財に指定されている。

なお当社に関しては別稿にて詳述する。

*15 『平』四二六一号

*16 「源平争乱期の八条院領―「八条院庁文書」を中心に―」（『石井進著作集』第7巻『中世史料論の世界』岩波書店、二〇〇五年。初出一九八八年）。

*17 寿永三年四月十六日平辰清寄進状案（『東寺百合文書』ホ函一〇）

*18 『綾部市史』史料編

(三) 氷上郡

柏原別宮（柏原荘・安田園）

柏原別宮は、現在の兵庫県丹波市柏原町に所在する石清水領である。

その初見は延久四年（一〇七二）九月五日の太政官牒に「丹波国一処 字安田園 氷上郡」として見える。そこに引用された氷上東県司の長元七年（一〇三四）十一月廿九日状によると、当地に別宮として大菩薩の御体を安置して神事を修していたが、旧司や寄人が他行して祭祀を継承する者がいなくなってしまう、早魃や疫病が絶えなかった。そこで祈祷したところ、治安三年（一〇二三）六月五日に八幡大菩薩の託宣が下り、自身が禍難をなしたことを告げた。そこで住民らは御体を顕し神殿を造立したところ、五穀成熟郷土安穩となったという。したがって別宮の設立は治安三年ないしこの直後であろう。そして長元八年国司源濟政が作田十町と寄人二十人を奉免して安田園が成立したとする。なお延久荘園整理令では三十町の免田のうち二十町が停廃されている。

その後保元三年十二月三日官宣旨では柏原別宮、承安三年三月八日の政始^{*19}では臨時祭召物下文を下される荘園の一つとして「栢原」の名が記される。

鎌倉期には、祠官内部での相論の対象として柏原別宮の名を見ることができ、弘安六年三月廿一日龜山上皇院宣では柏原荘などが祠官田中守清の門跡相承が認められる一方、所司らの所職相論に関しては宮寺の計らいとすることが裁定された^{*20}。また元徳二年十二月廿六日官宣旨では、検校田中陶清が当荘を別納として知行することが認められている^{*21}

*19 『石清水文書』五 宮寺縁事抄 政次第

*20 弘安九年三月十二日後宇多天皇綸旨（『田中家文書』一卷一三三号）・弘安十年二月廿日後宇多天皇綸旨（『田中家文書』一卷一三四号）

*21 元徳二年十二月廿六日官宣旨（『田中家文書』一卷二二二号）。なおこの文書をめぐっては市沢哲「鎌倉後期の公家政権の構造と展開—建武政権への一展望」『日本中世公家政治史の研究』（校倉書房 二〇一一年、初出は一九九二年）、徳永健太郎「神社領荘園における別相伝の展開」（『鎌倉遺文研究』九 二〇〇二年）がある。

(88)

室町期に入り文明元年には、柏原荘とその下司・公文職以下田畠などの当知行を確認する細川勝元書状と禁制が発給されている^{*22}。その後天文二年（一五三三）二月には柏原荘公文名散用状が残されており^{*23}、この頃まで石清水側による荘園支配が継続していたことがわかる。

なお当社に関しては別稿にて詳述したい。

（四）所在地不詳

栗栖

福志見山

いずれも前述の年月日不詳石清水璽御筥事裏文書に残された「治安三年十月五日 宮寺判申庄園別記事」のなかに丹波国の所領として記載されているが、この史料以外での所見をえられず、所在は不詳である。

三 鎌倉期以降成立の石清水領

（一）氷上郡

葛野荘

現在の兵庫県丹波市氷上町付近にあった荘園である。前出の応永三十年十一月十六日足利義持御判御教書によって、当莊地頭職が善法寺宋清に充て行われている。また文安六年（一四四九）二月廿二日本庄益政代官職請文では、「丹波国氷上郡葛野庄内地頭職八幡分御代管職」を毎年二十貫文で本庄益政が請け負っていることがわかる^{*24}。

葛野荘は葛野郷内の葛野牧を立荘したものであり、宝荘厳院領であった。嘉元四年（一三〇六）六月一二日の昭慶門院領目録案^{*25}では大宮院領であっ

^{*22} （文明元年カ）九月十八日細川勝元書状（『田中家文書』一卷二二三号）・文明元年九月廿二日細川勝元禁制写（『田中家文書』一卷二二四号）

^{*23} 天文二年十二月吉日柏原荘公文名散用状（『田中家文書』一卷二二七号）

^{*24} 『菊大路家文書』三二六号

^{*25} 『鎌』二十九卷二二六六一号

たが、元徳二年（一三三〇）に後醍醐天皇により宝莊嚴院執務職が東寺に寄進され^{*26}、葛野荘も東寺領となった。一方正慶元年（一三三二）六月より前には領家と地頭とのあいだで下地中分が行われており、地頭方は荻野五郎入道が知行していた^{*27}。康永二年（一三四三）十二月、守護仁木頼章に属していた守護代荻野朝忠が叛いたため山名時氏に攻められた。葛野荘地頭職もこの時没収されたのであろう。この地頭職が、のちに善法寺宋清に充て行われた所職である。

（二）多紀郡

酒井郷

現在の兵庫県丹波篠山市にあった所領である。前出の応永三十年十一月十六日足利義持御判御教書で、酒井郷地頭職が善法寺宋清に充て行われた。

細見末雄氏によると、酒井郷の郷名は『和名抄』に確認できず、地名としての確実な初見は既出の応永三十年十一月十六日足利義持御判御教書であるという^{*28}。一方『角川』の酒井荘項目では、古代から酒井郷が存在していたとする。

（三）所在地未詳

北荘

北荘は室町期に石清水領となった荘園である。前出の応永三十年（一四二二）十一月十六日足利義持御判御教書で石清水別当の善法寺宋清に充て行われている。

この北荘の所在地は未詳であるが、桑田郡ないし多紀郡に比定されている。桑田郡に比定する根拠としては、現在の京都府亀岡市千代川町に「北ノ庄」という地名が残ることと、隣接する吉富荘の承安年間作成絵図の写に「八幡宮領

*26 元徳二年正月廿八日後醍醐天皇綸旨（『鎌』三十九卷三〇八七九号）

*27 『鎌』四十一卷三一七七一号

*28 細見氏は相模国酒井郷より来住した酒井氏の勢力範囲を酒井郷としたのではないかと推測している（『丹波の荘園』）。

(90)

相交也」などの記載がみられることであり、『丹波の莊園』で細見氏は桑田郡に比定している。

一方、史料表記の「同北庄」の同が多紀郡のことであると解するならば、多紀北荘に比定される。多紀北荘は九条家領であったが、応永二十六年八月九日の九条家領不知行所々注文草案^{*29}によれば「丹波国多紀北庄〈自応永七年代官増位入道押領〉」とされ、したがって応永三十年ごろには不知行であったと推定される。

このうち桑田郡説は吉富荘絵図の「八幡宮領」記載を傍証とするが、応永三十年の寄進以前に北荘を石清水領とする史料的根拠がないため、絵図記載の文言は北荘以外の知られざる石清水領を指している可能性がある。また多紀郡説も、中世を通じて九条家が多紀荘領家職を有していることを考えると、下司職とは言え石清水に寄進するようなことがあるのか、疑問も少なからず残る。

その後永正十六年八月十五日に室町幕府奉行人連署奉書が発給された^{*30}。それによると永正五年、当荘代官職を香川美作守が懇望したため請文により契約したものの、未進が続き神役が退転しているので、社家の直務となすべきことを命じた内容である。香川美作守は未詳だが、守護細川氏の被官ではないかと推測される。

おわりに

丹波国における石清水領の概要として、以下の四点を指摘できる。

- (一) ほとんどが十二世紀までに成立した莊園・別宮である
- (二) 室町期の寄進を除き、立荘や所領化の経緯は不詳である
- (三) 十二世紀までの段階で国衙近在であることが明確な所領はない
- (四) 所領は天田郡以外の各郡に分布する

ということを指摘できる。

*29 『九条家文書』 一卷三〇号。

*30 『菊大路家文書』 二四一号。

成立時期や地理的分布に関してのきわだった特徴は見られないものの、十一世紀という早い時期から所領成立を確認することができ、荘号を持たず所領化している別宮が複数存在し、その内部構造を知る手掛かりとなる史料も残されている。また十二世紀までの段階で国衙近在に所領がみられないのも、逆に丹波における所領分布の一つの特徴であるといえる。十～十二世紀の丹波国内外の政治的社会的動向と合わせみることによって、石清水領としての立荘をめぐる政策的特徴を追うことも不可能ではないと思われるが、その分析は後日の課題としたい。

